

関連学会印象記

第60回日本胸部外科学会定期学術集会

田 林 暁 一*

第60回日本胸部外科学会定期学術集会は、2007年10月17日より20日までの四日間、仙台国際センター(仙台市)にて開催された(写真1)。

10月17日は、従来にならない心臓血管外科コース、呼吸器外科・食道外科コースに分けて Post-graduate Course を行い、参加者は約760名に及んだ。特に呼吸器外科・食道外科コースでは「肺外科医が知りたい食道・消化器外科の基礎知識」、 「食道外科医が知りたい肺・縦隔外科の基礎知識」といったそれぞれの領域で必要と思われる外科的知識を共有できる新しいプログラム構成があり、多数の参加者を得る一因であったと考えられる。こうしたプログラムは、日本胸部外科学会が心臓血管外科・呼吸器外科・食道外科の3分野から成っていることを勘案した上でも、今後さらに推進すべき企画であると思われた。同日午後の医療政策コースでは「チーム医療」に関するパネル

ディスカッションが行われ、基調講演として米国 Physician Assistant 協会 責任者・Marie-Michele Leger 氏による米国における PA 制度の概要について講演があり、その後、医師、コメディカル等のパネリストを交えて討論が行われた。医療の分業化は医療の安全性の向上、医師と患者の関係を良好に保つためにも欧米を中心として進展しつつある。我が国はその分野においての後進国であり、今回のパネルディスカッションは、今後医療の分業化を進めていく上で一つの方向性を示唆する内容であった。また、ハンズオンセミナーは学術発表と重複しないよう10月17日午後で開催された。例年同様に呼吸器外科、食道外科、心臓血管外科、人工心臓の4コースに分かれて講習が行われたが、全コースとも受講者が定員に達する盛況ぶりであり、今後のハンズオンセミナー実施の方向性を示すものになったと思われた。



写真1 学会会場入り口とメインテーム

*東北大学大学院医学系研究科心臓血管外科



写真3 特別企画「国際学会との連携」打ち合わせにて

(向かって左より松田 暉 前理事長, 田林暁一 理事長, Thomas L Spray AATS 副会長, John E Mayer Jr. STS 会長).



写真2 第60回日本胸部外科学会定期学術集会
田林暁一 会長挨拶

10月18日から20日午前までは学術集会在開催され、総参加者数はコメディカルも含めて約3,000名であった(写真2)。プログラムにおける特徴の一つは、従来よりシンポジウム、パネルディスカッションの数が少なく、一般演題数が多かったこと

で、一般演題は口演とフォーラムセッションに分けられ、口演の発表・討論時間が通常より長く設けられていたが、特に討論時間が長い点は好評であった。その他、国際学会との連携を活性化のため、セッションの前後に海外招請講演を組み込むといった工夫がなされ、発表者と講演者との間で活発な討論が行われる場面もあり、学会の国際化促進が期待された。学会抄録集にも一工夫があり、従来より演題・抄録の検索が非常に容易であった。また、English abstractの作成など海外からの参加者への配慮もなされていたことも学会の国際化への発展につながる工夫であると思われた(写真3)。

会場となった仙台国際センターは、特設会場を設置したものの3,000名規模の学会を開催する会場としては少々手狭で、また宿泊施設との交通利便性にも難があり、学会会場に関する諸々が今大会一番の問題点だったように思われる。

今回の学術集会のメインテーマは「新たなるマイルストーンをめざして」であり、新しい道標「知性の発現、実行、継続」を追求することであったが、これら全てを満たすものではなかったにしても、学術集会全体からその一部を感じることができたと思われる。